

平成 27 年度 「ひとりぼっちの子どもに対する居場所事業」

(倉敷トワイライトホーム) 活動レポート

(岡山県平成 27 年度多様な主体による地域支援事業)

もくじ

はじめに	… 1
子どもの貧困について	…2-4
社会福祉士実習を通じて生まれた倉敷トワイライトホーム	… 5-6
倉敷トワイライトホーム事業内容	… 7-8
現場の声 (子ども・保護者・大学生)	… 8-10
地域連携機関の声	… 11-14
子どもたちの様子	… 15
エピソード (季節行事など)	… 16-19
ボランティア育成	… 20
地域連携	… 21
寄付事業を通じた地域ネットワークの拡大	… 22-23
啓発活動・マスメディア	… 23-24
おわりに	… 25

はじめに

「夜をひとりぼっちで過ごす子どもたちの支援がしたい！」という学生がいて、「子どもたちのためにこの家を使ってもいいよ」と言う人がいて、「それをつなぐお手伝いをしよう」というぽっかぽかがあって、倉敷トワイライトホームは生まれました。

日頃の活動から、だれにでも安心できる居場所が必要だと実感していた私にとって「ひとりぼっちの子どもの居場所」を作りたいという学生たちの話はとても魅力的でした。それを応援できるチャンスがいただけたことに感謝します。

学生たちが思いを形にしていくことで、倉敷東小学校区社会福祉協議会の会長をはじめさまざまな立場の団体の協力をいただくことができたので、県の「多様な主体の協働による地域支援事業補助金」を受託し、活動をスタートできました。

ひとりぼっちで過ごす子どもを支えることが、子どもの貧困という社会の課題解決につながっていく、ということを感じていなかった私たちは、倉敷トワイライトホームという活動をきっかけにさまざまな社会の実態を学ぶ機会を得ました。そして、そこを共通理解とした上で協力体制を組んでもらえる方々に出会えたことが、本来ハードルが高いと言われる学校を核にした活動の展開に結びついているのだと思います。

2人の学生が思いをつないだことで、約60人の学生が所属する「子ども支援サークルにっこにこ」は生まれました。さらに、来年度の活動資金は自分たちで集めたいと学生が主体となって寄付金募集や助成金獲得のために積極的に動き、100名を超える寄付者から目標とした金額を集めることができました。

子どもを真ん中に、それを学生が包み、地域で活動する多様な団体が支え、地域の方たちを巻き込んで大きな波紋を広げています。まさにこれこそが、地域まるごと包括ケアのあるべき姿ではないかと嬉しく思うとともに、このような活動がさらに多くの場所で展開されていくことを期待してやみません。

特定非営利活動法人
子育て応援ナビぽっかぽか
理事 田口 陽子

1. 子どもの貧困について ―現状と課題―

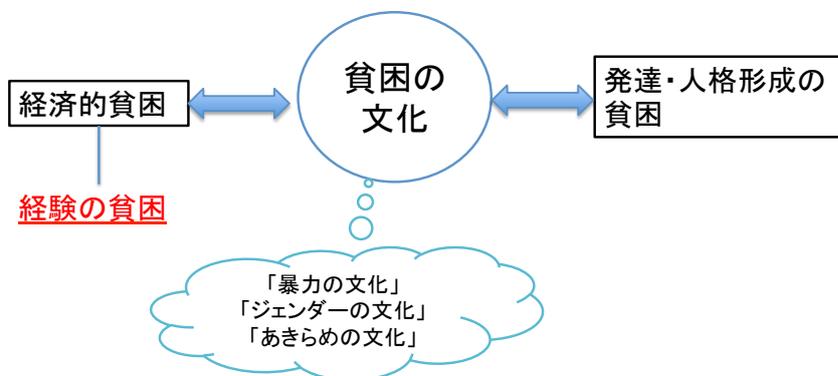
「日本の6人に1人（16.3%）の子どもが貧困状態にある」という言葉を聞いても実感が持てない人が多いと思います。そこには私たちの貧困に対するイメージそのものの偏りもあることは否定できないでしょう。

貧困には大別すると“絶対的貧困”と“相対的貧困”の2種類があります。“絶対的貧困”とは、衣食住などの根本的な欠如によって、生命の危険がある状態を意味しています。一方で“相対的貧困”とは、服や携帯などの物を持ってないわけではない、食べる物が全くなくて生命の危険があるわけでもありません。しかし、日本の文化的な基準に照らし合わせた際には不十分な状態にあることを指しています。

現代の日本の子どもの貧困で問われているのは明らかに後者です。絶対的貧困が日本において全く存在しないわけではありませんが、非常に稀なケースといえます。相対的貧困の例として、経済的理由などから食事が栄養バランスを考えて取れない場合がある、制服などの冬服を様々な理由で持っていない、外食や旅行などをすることが難しいなどがあります。また、生活保護や就学援助を受給していたとしても、その最低基準の低さから貧困状態に置かれている場合も多くあります。いずれにしても、目に見えにくい、気づきにくい貧困の状態を指している点に特徴があります。

例えば外食や旅行などが出来ないことはそれ自体は大したことはないと思う人が多いかもしれませんが、しかしながら、長期間貧困の状態に子どもが置かれることは、子どもの成長・発達に対して大きなダメージを与えることになります。浅井春夫（2013）によれば、経済的貧困などは貧困の文化を生み出し、それが子どもの成長や発達を阻害していくことになる」と指摘しています。

※貧困の再生産プロセス



引用・参考：浅井春夫（2013）「子どもの貧困と子ども家庭福祉―その理念と概念」浅井春夫編著『子ども家庭福祉第2版』建帛社、9-20.

図からもわかるように、貧困の文化には“あきらめの文化”があり、これは、「どうせ自分には出来ない」「特にしたいことも何もない」など、意欲に欠けると解釈されることが多々あります。しかしながら、子どもがこのような言う背景には貧困や虐待があることも多く、あきらめる経験、大人から裏切られる経験を多くしてきているが故のことであると頭に入れておかねばなりません。個人の努力や意欲を問う前に、こういった点への深い理解が求められます。

実際、現在社会の第一線で活躍している人、すでに退職し第二の人生を謳歌し始め、町内会や自治会活動などを担ういわゆる団塊世代の人などの中には、幼少期は貧しく苦勞したという人は少なくありません。働きながら勉強し、大学等を卒業して仕事に就き、努力して貧困を克服してきたのです。ある意味これは、日本において貧困を克服するスタンダードなモデルともなっているでしょう。

しかしながら、現代の日本社会は、このモデルの時代背景とは大きく変化してきています。例えば、経済成長の鈍化とマイナス成長、産業構造の変化と賃金格差が拡大する中で非正規雇用率の増加、それに伴う企業福祉の縮小、大学等の高等教育の市場化と普遍化などが現在の状況としてあります。このような状況に、生活保護費の削減と偏見の悪化、従来から変わらない低水準の社会保障（GDPに占める教育費の割合など）などが重なり合っています。それゆえ、従来までのモデルをそのまま当てはめるだけでは時代背景が違い過ぎ、明らかに限界があると言わざるを得ないのです。

実際、ひとり親の就業率は80%を超える世界最高水準にありながら、相対的貧困率も54.6%と高い値を示している事実は、明らかに個人の努力の問題を超えて、社会システムの問題として子どもの貧困があることを示しています。そして、ひとり親の約85%が母子家庭であることは、女性の権利等に関する問題がそこに存在しており、見逃せない事実と言えます。

これまで述べてきたように、子どもの貧困には2つの視点から取り組んでいく必要性があります。1つは今この瞬間に子どもの貧困状態にある子どもや家庭に対して寄り添い、食事などの生活支援や学習支援などの直接的な関わりを地域に生み出し、継続させていくことです。信頼できる大人がいること、理解し共に考え歩んでくれる人やコミュニティの存在は子どもやその家庭にとって何よりの支えとなります。

もう1つは、社会システムに対しての働きかけです。現在政策的に、児童扶養手当の2人目以降の増額の決定、給付型奨学金創設への動きはあるものの、未だ問題となるシステムそのものに働きかけるには至っていません。直接的な支援と社会システムに対する働きかけを、文化的側面まで含めたケアの方法論と政策的取り組み（経済的な貧困対策、行政的取り組みに対する改革）に分けて考えることは一定の有効性を持ちつつも、いかにその両者をつないでいくかもまた大きな課題といえます。子どもやその家庭という当事者の声をいかに政策へ届けていくか、彼らの声にならない声も置き去りにせず、解決に向けて共

に歩むことこそ問われているのではないのでしょうか。

子どもの貧困に対する対策は、ある意味で始まったばかりの萌芽的状况でもあります。しかしながら、目の前にいる子どもたちを前にして、対策を悠長に考えていくことも出来ません。地域や社会の関心が高まっている今こそ、国レベルだけでなく地方自治体レベルでの対策も前に進めていく推進力もまた、大きな課題と言えるでしょう。いずれにしても、今各地で起きつつある子どもやその家庭を支える仕組みが、システムを変えていく大きな原動力であることは間違いありません。この変革の原動力となる地域の内発的な取り組みが結びつき、日々の支援と政策の相乗効果を生み出していくことが必要であると言えるでしょう。

川崎医療福祉大学
医療福祉学部医療福祉学科
講師 直島 克樹

2. 「社会福祉士実習を通じて生まれた倉敷トワイライトホーム」

この活動を行なおうと思ったきっかけは、社会福祉士の資格を取るための実習です。私たちは子ども家庭福祉を専門とした日本社会福祉士会公認の独立型社会福祉士事務所である、京都の幸重社会福祉士事務所です約 1 か月間実習を行いました。いろんな機関を巡り、子どもの貧困課題や実態、現在行われている対策などについて学びました。その中で、大津市社会福祉協議会からの委託事業として行われているトワイライトホーム事業に参加しました。これが倉敷トワイライトホーム事業のモデルになった活動です。そこでは、親が就労等の理由で家におらず子どもだけで夜の時間を過ごしている子どもに対して、夜ご飯を一緒に作って食べたり、トランプ等の遊びをする生活支援をしました。また、子どもたちと岡山へ旅行に行くという普段出来ない体験も行いました。SNS 上で新たなプロジェクトを行い、旅費を集め、実際に岡山へ旅行に行ったりと貧困課題を抱えている世帯の子どもたちと関わりました。

その活動に参加していく中で、子どもの表情や言動が変わっていくのを感じました。はじめて会った頃は、距離を感じましたが、次第に打ち解けることが出来たり、子どもの方からふとした瞬間に将来のことを話してくれたりするなどの変化を見ることができました。実習という短い期間だったにもかかわらず、子どもの表情や言動がこんなにも変わるんだと思い感動しました。

実習やその振り返りの中で、私たちにある思いが芽生えてきました。それは、少しでも子どもの心に余裕が持てるような活動を岡山に帰った後に立ち上げたいという想いです。日々の生活で寂しさ等の貧困課題を抱え、苦しんでいる子どもがどの地域にもいることを学び、岡山でも子どもが安心して過ごせる居場所をつくり、子どもの心の支えとなりたいと考えました。その思いを実習の担当者に伝えると、実習のまとめとして、岡山に帰った時に基盤となる事業計画書作成を提案していただきました。

この事業計画書をもとに NPO 法人や地区社会福祉協議会の方々にプレゼンテーションを行い、アドバイス等をいただきました。また、専門職以外の地域住民の方々にも会議でプレゼンテーションをさせていただき理解を得るアプローチもしました。様々な団体、地域住民の方々との協力関係を築き、活動立ち上げの第一歩を踏み出しました。



公益財団法人みんなでつくる財団おかやま
share 会議での事業提案(2015年2月19日)

社会福祉士実習を行った幸重社会福祉士事務所幸重氏との記念撮影
(於：実習報告会 (2015年2月28日))



倉敷トワイライトホーム準備ミーティング
(於：倉敷トワイライトホーム (2015年4月7日))

準備実習 (学生による調理体験)



「倉敷トワイライトホーム」設立発起人
川崎医療福祉大学
医療福祉学部医療福祉学科4年
館潤也・山本和人

3. 「倉敷トワイライトホーム」事業内容

■ 目的

本事業は、普段の生活で社会的孤立を感じている子どもたちに、安心のできる居場所を提供し、生活支援を行うもので、子どもの主体性を尊重し、地域の方々とともに、子どもたちの未来を創ることを目的としています。特に子どもたちと年齢の近い大学生を中心にサポーターを組織していくことで、子どもたちが将来に対するイメージ等を描きやすいようにしていきます。また、NPO 法人子育て応援ナビぽっかぽかより相談員(ソーシャルワーカー)を独自に配置し、子どもへの生活支援を通じて、親等へのつながりを構築しながら、必要な支援へと結びつくことを支えていくことを目指します。この取り組みを地域との関係の中で進めていき、地域全体で子どもの貧困等に関連する問題を考え、子どもを支えていく繋がりをつくっていくことを目的としています。

■ 主な対象

親が就労などの理由のため夜等に家におらず、一人で夕方から夜(長期休暇の場合は日中も含む)の時間を過ごしている小中学生です。

■ 具体的な事業内容

○ 生活支援

のべ参加人数：350人

実施回数：88回

活動内容：サポーターとなる大学生が月曜日と金曜日の放課後に子どもたちと公園で一緒に遊んだり、ご飯を一緒に作って食べるなどコミュニケーションを図り、子どもの関心のある遊びなどにも取り組むことで子どもの主体性が尊重されるアットホームな居場所を作ることを心掛けた。活動時間は16時ごろから21時ごろまでとし、安全面を考慮して、家までの見送りの付随して行っている。夏休み等の長期休暇中は、昼の時間帯も行い、季節ごとのイベント等も実施した。





○ 学習支援

のべ参加人数・実施回数：随時

活動内容：特に学習という特定の時間は設けず、子どもとのその日その日の話し合いの中で実施した。宿題を学生とする日もあれば、一人でする日もあるなど、出来るだけ子どものペースで行うことを心掛けた。自分で宿題をして、学生に見せに来ることもあり、子どもが主体的に取り組むことを支えた。

4. 現場の声

(1) 子どもの感想

- ・「家の中で一人で過ごすよりは楽しい」
- ・「自分のやりたいことができる」
- ・「やりたいことが多すぎて時間が足りない」
- ・「一人はさびしい」
- ・「今日のトワイライトは何をして遊ぶかを毎回考えている」

(2) 保護者の感想

- ・「下の子どもに対してゆとりある関わりができるようになった」
- ・「自分の時間を持てるようになった」
- ・「トワイライトの日は安心して夜まで働ける」

(3) 大学生ボランティアの感想

・初めの頃に比べて子どもたちの笑顔が増えたように思う。人見知りをしていたのか、なかなか話してくれない子どももいたが、トワイライトホームの雰囲気慣れ、ありのまま楽しめるようになってきたと思う。最近では、子どもが自身の悩み事や学校での様子、家族のことも話してくれるようになった。「学校の文化祭に来てほしい」と、何度も言うこともあった。この人たちになら話しても大丈夫だと思ってもらえているのではないかと、信頼関係ができてきたのではないかと感じる。

・荷物を持ってほしい、荷物を持ってくれないと帰らない、肩車をしてほしいというような甘えが見られた。なかなか家に帰ろうとしなくて困ることもあるが、それだけ楽しいと思ってくれていることが嬉しいと感じる。

・活動を始めた当初は、毎回すすんでお手伝いをしてくれたり、自ら宿題をしたりと、学生の様子をうかがいながら行儀よく遊んでいた子どもであったが、時間が経つにつれて「自分」というものを出すようになったと感じる。自分のペースで自分のしたいことをするようになった。特に、工作や、外遊びのリクエストが増えてきた。また、自分から宿題をしなかった子どもは、学生が声かけをすることで自ら取り組めるようになった。遊ぶことを優先し宿題をしなくなかったようだが、最近では遊ぶ時間を増やすために学童で宿題を済ませてくることが多くなった。

・子どもたちの食の面では、よく食べる子どもと食べ残しをする子どもの二つにわかれてきたと思う。子どもたちは全員フルーツが大好きで、食卓に出すとすぐになくなってしまふ、おいしそうに食べている様子を見ていると私たち学生まで笑顔になれる。次週のメニューをリクエストしてくれる子どももいる。子どもたちのやりたいことや食べたいものなどはできる限り答えていきたいと考えている。子どもたちに野菜をたくさん使ったメニューを食べてもらいたいので、好き嫌いを把握したうえで野菜の切り方や調理の仕方、盛り付け方を工夫した。その成果が出たのか徐々に食べ残しが減ってきたように思う。また、子どもたちと餃子のタネを一から作るなどの料理や一緒におにぎりを作る経験をすることで「自分で作ったご飯がおいしい」と言って食べ残しをしない日もでてきた。

・食事の行儀は良いが、遊ぶ中ではしゃぎすぎてしまい机に上ったり、物を投げたりするなど部屋の中で騒ぐ様子が見られるようになった。また、気に入らないことがあるとすぐに「うざい」「どっかいけ」「死ね」「殺すぞ」などの言葉を学生に向けて言うようになった。トワイライトホーム設立時、子どもたちがトワイライトホームに行きたいと思ってもらえるよう、子どものことは叱らないと決めていたが暴言が続く様子や、人に向かって物を投

げる様子を見ていると注意した方が子どものためになると考えた。しかし、設立時の叱らないように気を付けるという意識も尊重しなければならないと考えているためどのように対応したらよいのか分からないという悩みを持った学生も複数いる。

・基本的に自由に過ごせるトワイライトホームであるが、遊び道具の少なさや一緒に遊ぶ学生の人数の確保の問題があり、子ども同士の喧嘩が増えてきたと感じる。遊び場所、遊び道具の確保、喧嘩をどのようにおさめるか、喧嘩をさせないようにすることが課題だと思われる。



5. 地域連携機関の声

(1) 倉敷東学区社会福祉協議会 会長 辻正男さん

「倉敷トワイライトホーム 活動の一年」

社会福祉協議会の活動といえば「高齢者への福祉対応」と結び付けられがちですが、本来は年配者からお子さんまでを対象とすることが求められており、我々もこの地区にお住まいの皆さんが住みやすい地域作りのために多方面の協力を得て活動しています。

皆様ご存知のように子どもの貧困は6人に一人とも言われ、子育てに関する問題の深刻さはようやく世間でも認識され始めました。ただ、これは家庭のみで完結するわけではありません。また、学校ですべて対応できる訳でもなく地域ぐるみで支援する必要がある、との認識で当倉敷東学区社協では平成27年後から新たに「子育て支援事業」に取り組んできました。

この問題の原因は貧困を生み出す社会にあるのかもしれませんが、しかしまずは子どもの居場所を作って「子どもを救うこと」が大事だろう、と活動の一つとして駅前の民家を借り川崎医療福祉大学の若者の協力を得て「トワイライトホーム」が始まりました。

幸いにも本年度は補助金も戴いて開始することができました。活動開始に当たり地域にも挨拶に行くという当たり前のこともする中で、物品・食糧の寄付はもとより多種多様な協力も得ることができたことは励みになっています。

なお、ご承知のように個人情報保護等の関係で部外者にとってはなかなか対象者を絞り込むことが難しいのですが、状況を良く把握されている小学校を巻き込むことができたこと、活動の中で少しずつではあるけれど子どもさんが変わってきたことはいずれも大きな成果であると思っております。

ボランティアとはいえ何かを継続するには資金も必要です。そのため補助金の切れる次年度以降も継続させるために智恵を絞っての「お金集め」も始めています。今、世の中で「子育て支援」という言葉だけは頻繁に聞かれるようにはなりましたがまだまだ「公的な金銭支援」は不十分です。是非とも色々な形で補助金を受けられる仕組みの継続を切にお願い申し上げます。

(2) 倉敷東小学校 校長 長濱美根子さん

「倉敷トワイライトホームに感謝」

昨年4月に本校にて第1回の会議が開かれた時のことである。川崎医療福祉大学医療福祉学部講師 直島克樹先生から、「子どもの貧困」の課題に向き合うため、学区内の空き家を借りて居場所事業を始めるに当たって、何より重要なことは学校との連携であるというお話があった。

本校に赴任して一年間経った頃、十分とはいえない家庭環境の影響で学校生活に支障をきたしている子どもたちを心配していた私にとって、大変ありがたい事業と先生の思いであった。家庭や学校以外にほっとできる居場所があり、そこでは子どもたちの心身の安全が保障されることはとても大切なことである。

居場所を見つけた子どもたちは、ゆっくりではあるが確かに変容しつつある。

AさんB君の姉弟は、自分らしさを発揮できるようになり、生活リズムが少しずつ整って登校時刻が早くなってきた。友達とも関われるようになり笑顔が増えてきた。家庭では我慢することが多いC君は、大学生のお兄さんやお姉さんに自分の気持ちを聞いてもらえる時間があることで、学校での生活も落ち着いてきた。

学校にしかできないこと、学校ではできないことを考えながら、今後もトワイライトホーム等関係機関との連携を図りながら子どもたちへの温かい支援を積み重ねていきたい。

(3) 倉敷東学区主任児童委員 早瀬さん

「人は変わる。」今回の活動を通してそう実感しました。小学校の校長先生と学童の先生の声掛けも大きかったと思いますが、トワイライトホームの力が最も動かしたのではないかと思います。

私は、主任児童委員をしています。直接かかわってはおりませんが、何か手伝えることがあればと思い、お話が合った夏頃、連絡先を書いてポストに入れました。見てもらえたのかもわからず、同じ町内に住んでいながら、顔見知りになるきっかけさえ無く、限界を感じていました。

トワイライトホームは新聞記事で知っていましたが、問題の無い学区でしたし、他人事のようにぼんやりとした感覚を持っていました。それが大間違いで、『見えない』という事だったのです。

2回ほどの子育て応援会議ではトワイライトホームや学校での子供達の様子を聞きました。問題が多く、改善していくには時間がかかりそうでした。福祉を学んでこなかった私はどうすることも出来ず、見学を試みました。行くまでは子ども達に会うことが怖かったのですが、実際には明るく、楽しそうな雰囲気、呆気にとられたのを覚えています。工夫いっぱいの食事。品数も豊富で、子ども達の好みにも対応。つまみ食いも少しなら OK。宿題をしたり、遊んだり。子ども達も学生さんも表情が明るく、ニコニコ。居心地の良さを感じられました。

次に服数が少ないというので、学生さん企画のリサイクルバザーの手伝いをしました。学区内で集めた中から、お気に入りを選べたので目的は達成できたと思います。

3 回目の会議では「不登校に少し変化があった。」と報告を受けました。朝、少し早く起き、学校に積極的に行こう。と頑張れるようになったのです。短期間での前進。驚きました。次の変化が楽しみでもあり、勉強させてもらいたいと思います。

核家族や多様な家庭の形が増え、困っていても当事者が声を出さないと全く分からない（見えにくい）現代です。トワイライトホームのように食事つきで見守ってもらえるのは理想的だと思います。加えて学生さん達のような若い方々は子ども達にとっても接しやすく、話題や服、食の好みも近いので兄弟のような関係も築ける。目標や憧れ（お兄さん、お姉さんのようにになりたい等）の対象にもなる。（私くらいの年代は親目線で接してしまうのではないかと思います。）親にとっても、余裕が出来、穏やかに子どもと向かい合え、好循環。間接的だが、親への支援の重要性を実感しました。そして、他学区でも不登校支援はしているが、それ以上はないと聞きますので、ますます需要が高まりそうです。

子どもの貧困は国会でも取り上げられ、支援の必要性が叫ばれています。倉敷市においてもその先駆けとして輪が広がり、進んでいくよう願います。

(4) 倉敷東学区社会福祉協議会 理事（子ども部会）井上さん

「孤独死」「老後破産」「居場所」と老人問題の陰に隠れてしまっていた子ども達を取り巻く環境、どうしてこうも変わってしまったのか、心が痛みます。

昨年夏の中1の男の子、女の子、まだまだあどけなさが残る小学生の顔です。二人は何のために生まれてきたんでしょう。12年という短い命、成人した大人によって簡単に奪われてしまいました。その後も乳幼児の虐待、それも10代の子ども達の犯罪が、後をたちません。これから先を思うと、大人によって作られた社会環境の中で子ども達はどうなるのか私たちの子どもの頃からは考えることができません。

「子どもの貧困」に目を向け、前進を始めた川崎医療福祉大の学生によるゼミのサークルでの取り組みには素晴らしいものがあります。トワイライトホームでの子ども達にとっての“今”が大切な気がします。私達、大人にはできない子ども達との関係づくり、日を追う毎に表情も豊かに成り、気を負わない、気構える事のない自然体の中での信頼関係が生まれているんだなと思われまます。学生であるお兄ちゃん、お姉ちゃんたちとの年令の距離感が大変重要だと思わざるを得ません。家族関係も多様化し、行きつく先が見えづらく、寂しい気がしてきます。学生たちはしっかり子ども達に寄り添い、つかず離れずの関係の中で確かに根付いてきているものがあるように思えます。

私達は、地域の住民として何ができるのか、何が必要なのかを考え学生たちを外から支える、陰乍らさりげなくサポートしてゆく事に尽きると思います、東学区の地域の中から不幸な子ども達を出さないように地域ぐるみで守り続けてゆく事が大切だと思います

(5) 倉敷東学区社会福祉協議会 理事（子ども部会）犬飼さん

「6人に1人が貧困家庭」。悲しい言葉を耳にします。家族の形態が変わり、その上親の事情で生活環境が一転、ひとり親世帯の子育てと仕事の両立は厳しいものです。労働賃金の格差があり、貧困から抜け出せない、ますます親も子どもの将来の不安を募らせ、生きる希望さえも失いかねない状況に追いやられる。

向こう三軒両隣で支えあう事は昔の事で、家庭の中までは立ち入れない現状である。東学区でも社会福祉協議会を立ち上げ、その中の1つに、子育て支援事業があり、川崎医療福祉大学の学生ボランティアによる、小中学生の夜の勉強、食事等の生活支援をサポートして下さる事となり、短時間ではありますが、学生と楽しく遊び、おしゃべりする事で、元気をもらい、本当に心がほっとする時間になっていると思います。又、親の考え方、気持ちも少しずつ変わって来ると思います。

私達も、学生さんの若い力を借りながら、本当に子供らしく、安心して当たり前の生活が出来るように、陰で援助していきたいと思います。学生の取り組み、地域の方の見守り、又色々な物資の支援の輪を広げ自然体で、手がさしのべられるような地域づくりが出来たらと思います。

子どもは、地域の宝です。

6. 子どもたちの様子

(1)嬉しかった出来事、言葉、行動

- ・倉敷トワイライトホームの活動を子ども達自身が楽しみにしてくれていること
- ・「ご飯が美味しい」と言ってくれたこと
- ・トワイライトの活動で遊びたいからと家で宿題をしてくるようになったこと
- ・楽しそうな笑顔を見せてくれたこと
- ・自分の家族の話をしてくれるようになったこと
- ・学生ボランティアの名前を呼んでくれるようになったこと
- ・ご飯をいつも残してしまう子どもが全部完食したこと
- ・クリスマスパーティーを行った際に、違う曜日の子ども同士が仲良く遊んでいたこと
- ・子どもが自分のしたいこと、やりたいことを言ってくれるようになったこと
- ・中々家に帰ろうとしないけど、それだけ楽しいと思ってくれていること

などが挙げられ、子どもにとっても良い影響が表れていると思われます。

これからも継続的にこの活動を行っていき、子どもと関わっていきたいと思います

(2)悲しかった出来事、言葉、行動

- ・子どもの気分にムラがあり、「うるさい」「死ね」「黙れ」「あっち行け」などの暴言を吐かれること

そのような場合、学生ボランティアがどのような対応を取るべきなのか分からなくなる時がありました。しかし、基本的に子どもの主体性を尊重して活動しているので、子どもが暴言を吐いたり、自分の気分で行動できるのは、自分を出せていると肯定的に捉えています。そのため、学生間で意見交換や情報の共有により、学生たちが受容できるように努めています。

今後、学生ボランティアが悲しむような体験をした場合、周りの人たちでフォローし合えるような関係づくりを行っていきたいと考えています。

7. エピソード (季節行事など)

(1) 七夕祭り

七夕祭りを開催した目的は、地域のお年寄りと子ども、学生の交流を深めるためです。学生と地域のお年寄りでちらし寿司を作り、トワイライトホームに来てくれた方と一緒に食べたり、一人暮らしのお年寄りの家を訪ねて配りました。どの世代にも楽しんでもらえるように笹を用意し、短冊に願い事を書いて結んでもらったり、折り紙で鶴や七夕飾りを作ったり、トイレットペーパーの芯で織姫と彦星を作るなど工作を行いました。学生が一から企画する初めての行事でしたが、地域の方との関係づくりができたと思います。



↑ 笹の葉と飾り



↑ 折り紙の織姫と彦星

↓ 室内の様子(七夕仕様)



(2) クリスマス会

トワイライトホームにて実施しました。参加者は、トワイライトホームに来てくれている子どもと学生で、子どもたちはプラ板づくりに夢中になっている様子うかがえました。また、料理も、クリスマス仕様のメニューにし、ギター演奏も行うなど普段のトワイライトホームとは異なる雰囲気をつくりました。部屋の飾りつけもクリスマス仕様にするため、折り紙で雪の結晶やツリーなどを作り、部屋に飾りつけ、学生はサンタの帽子をかぶって子どもたちを出迎えました。帰り際にはクリスマスプレゼントも渡し、子どもたちも喜んでいました。



↑クリスマスケーキを作っている様子
←学生が切り紙で作ったクリスマスツリー



↑子どもとギターを弾く様子
←クリスマス仕様の夕食

- ・オラフのハヤシライス
- ・ブロッコリーのツリーサラダ



(3) フリーマーケット

トワイライトホームの活動の中で子どものズボンが破れていることに学生が気づき、服を届けたいという思いで地区社会福祉協議会の方に協力していただき企画・運営した。服をただあげるのではなく、地域を巻き込むことで、学生と子ども、地域のつながりをつくることができる。このイベントとして子どもたちや地域の方に服を安く買ってもらうことができ、当初の目的であった子どもに服を届けることが達成できた。またトワイライトと地域の連携をさらに強める機会になった。



(4) 餅つき

学生と子どもと一緒に地域の餅つきに参加した。餅をついたり、丸めたり、食べたりしながら過ごした。子どもたちは「餅つきをするのは二回目」と言っており、積極的に参加していた。地域の方との交流を深められる良い経験になった。



8. ボランティア育成

(1) CAP 研修

事業が始まる前、子どもとの正しい接し方等を学ぶために連携団体である CAP おかやまの研修を川崎医療福祉大学内で行いました。CAP おかやまとは、岡山県南部地域を中心に、子どもたちがいじめ、虐待、性暴力などさまざまな暴力から自分を守るための教育プログラム「CAP プログラム」を、ロールプレイや話し合いを交えたワークショップを通して提供している団体です。

私たちが受けたワークショップは、「子どもの話を聴く」ためのワークショップです。子どもの言葉や行動の裏に隠れた想いをどのように受けとめるか等のお話を聞きました。今後も定期的に学習の場を作っていきたいと考えています。



(2) 「子ども支援サークルにっこにこ」の設立

トワイライトホーム事業を立ち上げても、実際に活動に参加してくれる学生サポーターが集まらなければ意味がありません。また、この事業を継続的にこなっていくためにも学内にサークルとして残していこうと考えました。

その考えのもと設立されたのが「子ども支援サークルにっこにこ」です。サークル名は、日々の生活の中で寂しさを感じている子どもたちが私たちの活動を通して、にっこにことした笑顔が増えていきますようにという願いを込めて付けました。

現在の学生サポーターは 50 名を超え、今後新たな活動等も増やしていきたいと考えています。昨年では、本学での学園祭において寄付付き商品を発売し、多くのお客様に買っていただき約 8 万円もの寄付金が集まりました。毎月第 2 水曜日には、学内でミーティングを行い、トワイライト活動に入る学生の割り振り等も行っています。

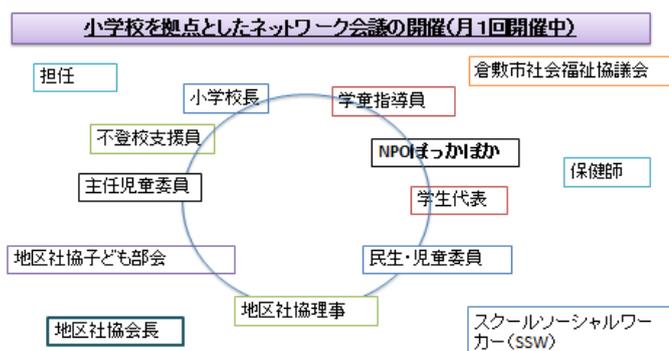


9. 地域連携

■ 小学校でのネットワーク会議（実施回数：7回）

今回の活動を通じて、学校は困難な家庭と子どもたちを把握していたが、民生委員や主任児童委員も含め、地域はその実態を把握することはできていなかった。本事業のもう一つの柱である子どもたちを支えていく地域・コミュニティづくりを進めるために、地域の子どもの状況を把握するための連携会議を、月1回小学校において実施している。主な参加者は、校長、トワイライトを利用している子どものいる地区の民生委員、東学区民生委員会会長、主任児童委員、地区社協理事（子ども部会担当）、学童指導員、NPO相談員、学生である。

支援ネットワークの形成



作成：直島克樹

本会議を通じて、学校と地域とが情報を共有するだけでなく、地域で福祉活動を担う方達と子どもたちの接点を作ることにもなった。民生委員や地区社協理事などが定期的にホームを訪問することにより、子どもたちとの顔のつながりが生まれたことも、この会議の一つの成果と言える。また、情報交換を行う中で、子どもの状態に改善の傾向が見られるが、家庭に対しても何らかの支援が必要であるということになり、学校の方から教育委員会にスクールソーシャルワーカーの派遣を要請し、今後専門家を交えた支援にも繋がっていくことが生み出したことも、連携会議の成果であった。

- 倉敷東学区社会福祉協議会理事会での状況報告（2回）
- 倉敷トワイライトホーム活動拠点周辺地域への挨拶
- 倉敷市市民協働による地域課題の解決会議への参加
- 倉敷市による生活困窮者支援ネットワーク会議への参加
- 岡山ユースミーティングと協働した関係団体ネットワークミーティングの開催

（2016年3月11日）

10. 寄付事業を通じた地域ネットワークの拡大

私たちは、来年度の活動資金を集めるために、公益財団法人みんなで作る財団おかやまさん（以下みんなつく）のご協力の下、第7期割り勘事業において寄付事業を行わせていただいた（最終助成金額：62万2千円）。この事業では、寄付を集めることはもちろんだが、倉敷トワイライトホームの活動内容や活動の実施背景にある子どもの貧困問題への理解を深め、活動を多くの方に広め、地域ネットワークを拡大することに重点を置いた。

活動を知ってもらうためには、やはり自分たちで直接、地域住民の方に話しをさせていただくことが一番だと考え、東学区コミュニティ協議会特別委員会やみんなつくが主催するshare会議など、多くの地域住民の方が集まる場所で説明をさせていただいた。事業について説明していく中で、「自分の地域にそんな子どもの貧困があるとは思わなかった。」「学生だからできることも多いと思うから頑張ってもらいたい」などのお声をいただき、確実に地域での理解を得てきていると実感し、寄付事業を行う励みとなった。

また、大学のOB会や岡山県社会福祉士会の中田会長にも学生自ら連絡を取り、ご協力していただけるようにお話をさせていただいた。その結果、OB会のHPと社会福祉士会の広報誌に活動紹介を掲載していただき、新たなつながりをつくるとともに、より多くの方に活動を知ってもらえたのではないかと思います。

今回の寄付活動を通じて、地域の方をはじめ、地域活動に関わる専門職など多くの方と関わらせていただき、私たち倉敷トワイライトホームの活動が広がるとともに、期待も高まっていることを感じた。その期待に応えていけるように、今回集まった寄付に込められている思いを無駄にしないためにも、子どもたちのために全力を尽くしたい。

川崎医療福祉大学
医療福祉学部医療福祉学科3年
森田 裕至 小林 奈月



■ これまで頂いた寄付一覧

IH クッキングヒーター, ホットプレート, 洗濯機, 冷蔵庫, ホットカーペット, 座布団, ゴミ箱, 絵本, 生ごみ処理機, 自転車, 食器類, タオル, 寿司桶, 調味料セット, 飲み物, お菓子, 雑紙, テーブルクロス, 米, トマト・ジャガイモ・とうもろこしなどの季節の野菜, 果物, こたつ机, 軽トラでの荷物運び, 活動の見守りなど



11. 啓発活動・メディア

■ 見学者の受け入れ（随時）

倉敷東学区社協理事, 倉敷市社協・実習生, YMCA せとうち, 一般社団法人子どもの家, 岡山県社会福祉士会のメンバー, スクールソーシャルワーカー, 岡山市市民活動グループ, 倉敷市市民活動グループ, 瀬戸南高等学校生徒・教諭, 岡山県内大学生（ノートルダム清心女子大学, 中国学園大学）, フードバンク岡山, 倉敷教会, 母子生活支援施設職員, 児童家庭支援センター職員, マスメディア関係者など



■ 川崎学園学園祭への出店（2015年10月10日・11日）

■ 川崎医療福祉大学医療福祉学科セミナーでの報告（2015年12月12日）



- 一般財団法人あすのば交流会、意見交換会への参加（2015年12月12日）
- STOP子どもの貧困！岡山ユースミーティングへの参加（2015年12月13日）



トワイライトホームの活動の一端を紹介することで、多くの岡山市議会議員、岡山県議会議員ならびにメディアを介して啓発することができた。

- 社会福祉法人四つ葉会職員研修での活動紹介（2016年2月22日）
- 中庄地区小地域ケア会議での活動紹介（2016年3月11日）
- 岡山県民フォーラム in 赤磐での報告（2016年3月13日）
- 岡山県社会福祉士会総会での活動紹介（2016年3月19日）



- 学生団体による facebook ページの立ち上げ
(<https://www.facebook.com/倉敷トワイライトホーム-516048235220558/?fref=ts>)
- FM ぐらしき「縁 join! SPO×T」2015年12月11日
- KSB「スーパーJチャンネル」2015年12月11日
(https://www.facebook.com/permalink.php?story_fbid=1510591582583852&id=100008990730693)
- 山陽新聞 2016年2月27日朝刊「貧困世帯の子ども支援」
- 山陽新聞 2016年3月20日朝刊「あすを聞く：子どもの貧困求められる対策は」

おわりに

「倉敷トワイライトホーム」は、本当に多くの方の理解と協力によって成り立っています。やはりこの事業の一番の特徴は、NPO、地域住民組織（地区社協）、そして若い力である大学生が一体となって取り組んでいる点にあると思います。それぞれがそれぞれの良さを引き出し合っています。子どもたちやその家庭の幸せは、本人たちの努力ではなく、実は周囲の良い関係性から生まれてくるものだと思います。この事業を通じて生まれた地域の関係性は、きっと困難を抱えた子どもや家庭に対してもプラスに働いてくれるものと思っています。むしろ、子どもの貧困問題に対して、地域レベルで出来ることのひとつの形であろうと思っています。

この報告書の最後に何がふさわしいのかを考えた時、やはり「倉敷トワイライトホーム」生み出した 2 人との思い出を振り返る方がいいかと思い、少しだけ個人的な想いを書くことをお許し願いたいと思います。

「倉敷トワイライトホーム」は、社会福祉士実習を終えた学生 2 人（舘潤也くん・山本和人くん）の子どもの貧困問題を何とかしたいという想いが、NPO、地域組織の共感を呼び、結実したものです。すでに本事業のきっかけで紹介されているように、彼らは京都の幸重社会福祉士事務所に実習へ行かせて頂きました。実習が進むに連れ、彼らの表情、言動などがどんどん変わっていき、そのことに対して驚きと嬉しさを感じたのを今でも忘れることは出来ません。

実習を終えてからの彼らとのやり取りは、実習指導を超えたソーシャルワーク実践のパートナーのようなものだった気がしています。彼らには、正直学生にここまで求めていいのかということまで求めました。時には厳しいことも言ったと思います。しかし、それに応えてくる彼らに、私も刺激を受け、大学教員としても、そしてソーシャルワーカーとしても多くのことを学ばせてもらいました。今は感謝の気持ちでいっぱいです。2 人とも社会福祉の領域で働くことが決まっています。これからの彼らの活躍を本当に楽しみにしています。

最後になりましたが、「倉敷トワイライトホーム」は、どんな子どもや家族でも居場所と感じられる場を目指したものです。何か特別なことを提供するというよりも、いつまでも緩やかにある居心地のよい居場所であることが彼らの願いです。彼らの後を継いだ学生たちも、自ら資金を獲得するなど本当によく頑張っています。変わらねばならないのは子どもではなく大人である私たちです。この報告書が、子どものために一步でも踏み出すきっかけになれば幸いです。

川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科講師
特定非営利活動法人子育て応援ナビぽっかぽか理事
直島 克樹

「ひとりぼっちの子どもに対する居場所事業」
(倉敷トワイライトホーム)活動報告書(H27)

編集 : 特定非営利活動法人子育て応援ナビぽっかぽか

編集協力 : 川崎医療福祉大学子ども支援サークルにっこにこ

紀 奈那 (代表)

森田 裕至 (副代表)

小林 奈月

藤澤 祐輔

舘 潤也

山本 和人